

人生の軌跡の再構成と学校経験に関する一考察 —ある一人の女性のライフストーリーの分析から— Reconstruction of Life Stories and Experiences at School: Analysis of an Autobiographical Narrative Interview with One Woman

ビアルケ (當山) 千咲 TOYAMA-BIALKE, Chisaki

● 国際基督教大学教育研究所
International Christian University, Institute for Educational Research and Service

青木 幸子 AOKI, Sachiko

● お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士前期課程
Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University

Keywords ライフストーリー, 学校経験, ナラティブ・インタビュー,
事例媒介的アプローチ

Life story, experiences at school, autobiographical narrative interview,
case-mediated approach

ABSTRACT

In the changing society in postmodern age, it is becoming more necessary to focus on the individuals who assign meanings to their various experiences and construct the lives from their own unique point of view. The purpose of this article is to reconstruct a life story told by one woman in an autobiographical narrative interview and to consider the meanings of her experiences at school in the context of her whole life process. This analysis is based on the “Case-Mediated Approach” developed by S. Mizuno. Its primary task is a particular understanding of the case in question which should be followed by comparative analyses of other cases to approach the research objective. The case is analysed by focusing not only on main topics which are selected and arranged by the interviewee in a particular order, but also on changing perspectives over time from which the interviewee told her life story. Thus, her life story is elucidated by distinguishing the factual life process which consists of her experiences and actions in the past from her retrospective interpretation of her life. After this reconstruction, the following question is examined: which sustained effects do her experiences at school such as teacher-student-relationships and peer relationships have on the sequential process of her further life and how are these experiences embedded in the whole context of her social environment in each life stage? The analysis of an individual case presented here indicates the possibility to approach meanings of the school in a new way that has not been attempted by previous studies on school education.

1 はじめに

本稿の目的は、Sという女性のライフストーリー（人生の物語）から、その人生の軌跡を再構成した上で、その中の学校経験を考察することである。

人々の人生の物語を対象とする研究には様々なものがあるが、桜井（2002）はその共通点として、変動する社会構造内の個人に照準し、主体の経験の主観的な意味を重視すること、個人的なものを社会的なものに関連づけて解釈することを挙げている。中でも「ライフストーリー」研究は、文化人類学・社会学において蓄積を持つ「ライフヒストリー」研究と混同されやすいが、やまだ（2000）によると、「ライフヒストリー」研究は「人生の歴史的真相を表そうとし」ているのに対し、「ライフストーリー」研究は「生きられた人生の経験的真相を表そうとしている」という。本稿の関心は後者にあるため、ここではその呼称を用いる。また社会学における生活史研究を概観し、その分節化を唱えた水野（1986）は、個性をもったままの諸個人に焦点を当て、その人生の軌跡を浮き彫りにする「個人生活史」が変動社会において重要になるとしているが、本稿はこうした「個人生活史」と関心を同じくする。このような人生の物語の個別性に焦点を当てるのは次の理由による。まず個人は何らかの枠組みによって自らの経験を意味づけ、行為しているが、その枠組みを構成するのが物語であり、物語がこの「経験→意味→行為」という移行過程を推進するという（やまだ、2000）。浅野（2001）は社会学的な視点から、自己という現象の生成と変容の理解に「自己物語」が鍵となると述べているが、「人生の物語」はこうした「自己物語」であり、個人が経験を解釈し、人生を構築してゆく枠組みとして、その個人に特徴的な側面を持つといえる。急速に変動する現代社会では価値観が多様化し、「自分探し」や「自分らしさ」が人々の関心事となっているが、個人と社会の接点を捉えようとする時、社会学が従来着目してきた社会

的カテゴリーや属性に対して、こうした個人に特徴的な枠組みが比重を増してきていると考えられる。そうした社会では、複数の生活諸領域における多様な経験を個人がその統一的視点から意味づけ、行為し、人生を構築しようとする傾向が強まっていると想定できるからである。したがって、研究者の関心から特定の社会的カテゴリーや生活領域によって対象を選定しそれに注目しても、それ以外のカテゴリーが対象者の人生に与える影響が大きい場合もありうると考えられる（水野、1986）。本稿は学校研究の領域においてこうした視点の転換を試み、人生を構築する個人の経験の全体的文脈の中でその学校経験を考察するものである。

これまでにこうした立場から学校経験を対象とした先行研究は非常に少なく、その方法も分析の焦点も異なる。例えば人々の「学校の原風景」の語りを対象としている藤江・本山（2003）は本稿の関心と近いが、初めから研究者の関心である学校経験に限定した語りを複数用い、その構成から一般化を目指す点が、人生の物語全体の文脈や、その個別性により照準を合わせる本稿と立場を異にする。また学校という「場」の特徴と個々の生徒の特徴とのマッチングに着目する学校臨床学の立場から、諸個人の人生の経験の中で学校経験と当人の成長の関係を捉えようとした高橋（2002）の試みは、個別事例に徹している点で本稿の関心と重複する。こうした研究は日本ではまだ端緒に就いたばかりであるのに対し、欧米、特にドイツでは学校研究や子ども・青年研究において既に広がりを見せている（ピアルケ、2004）。それは、個別事例の詳細な解明を踏まえた上で事例比較を重ねる理論生成的アプローチとも呼べるもので、本稿はこうした潮流に接続するものである。

2 方法

対象となった人生の物語は、Sという女性の自叙伝的ナラティブで、Schützeのナラティブ・インタビューの方法（Flick訳書，2002）で収集された。これは初めのナラティブ生成質問後に語り手の語りが始まると、それが一旦終了するまで聞き手は傾聴マーカー以外は基本的に口を挟まないという方法で、時間軸にそって選択・配列された諸出来事のまとまりである物語の「閉鎖性」（浅野，2001）を可能な限りそのまま保持することを目指している。Sは、筆者の一人（青木）が山口県のA高校の放送部顧問であったときの部員で、現在35歳の女性である。青木は「今までどんな風な人生を歩んで今に至ったのか話を聞かせてもらいたい」と事前に依頼し、2004年5月13日にSの自宅にて約3時間のインタビューを行った（以下では、これを「第1の語り」と呼ぶ）。トランスクリプトはS本人にも渡され、その後、思い出した出来事等が他にもあったとSより連絡があり、2回目のインタビューを7月20日に2時間半程行った（以下「第2の語り」とする）¹⁾。

多くの人生の物語やナラティブの研究が指摘するように、語りは語り手と聞き手の相互作用の中で生成する。かつての教師生徒関係が今回の語りにも及ぼす影響に関しては、特に第1の語りにおいて高校時代について多くが語られたものの、その内容は語り全体における内的一貫性（桜井，2002，p. 40）を示しており、人生の物語を過剰にゆがめるような種類の問題は基本的にないと考えられた。また親密なレベルの経験についても自主的に語られる信頼関係がむしろ語りの内容の深さにも好影響をもたらしたと判断された。

3 分析手続き²⁾

分析には、個人現象を素材にできる限り即して解明する「事例媒介的アプローチ」の立場から、既にいくつかの事例の分析で成果を上げているCM法（水野，2000）を採用した。手続きと

しては、まず圧縮版（水野，2000では「一行見出し」と呼ばれる）を作成しセグメント化した後、アイデアを生成し練り上げながら、以下のような分析手続きをとった。

まず、Sの語りには昔の自分と今の自分を対照的に説明している箇所が多くあり、それらは、㊦〈表現〉と㊧〈人間関係〉の2つのテーマに整理できた。つまり㊦に関してSは、昔は【人としゃべるのが怖い】（以下、「第1の語り」からの表現の引用は【 】,「第2の語り」のそれは[]と表す）と同時に、気持ちを表現することは【かっこ悪い】と突っ張ってできなかった。また自分と合わないと思う相手に対してはコミュニケーションを断っていたのが、今は素直に自分の気持ちを表現できるようになってきており、コミュニケーションが大事だと思うようになったと述べている。また㊧に関しては、昔は【一人である】のが【好き】でありながら、周囲から【友だちいなくて可哀想】と思われるのがいやで【不安】と感じていた。そのため昔は少数の友人に限定して親密な関係を結んでいたが、今は【一人でも平気】になり、また【色んな人と親密な】関係を構築するようになった。つまり「昔のS」から「今のS」への変容の過程がSの人生の物語では語られているといえる。

こうした特徴を踏まえた上で、分析の次元を2つ設定することにした。1つは、以下の4つの主要なテーマに着目するという次元である。まず上述の2つのテーマ、すなわち㊦〈表現〉と㊧〈人間関係〉の変容過程は、特に第1の語りでは、出来事を選択・配列としての物語の核となるようなストーリーを構成して語られている。この他に、第1の語りではやや周縁的に位置づけられ、断片的な言及であるものの、㊨「ジェンダー経験」と㊩「家族関係」の2つが「人間関係」の中でもとりわけテーマとして浮かびあがってきた。㊨「ジェンダー経験」は第1の語りでは㊦と㊧に比べ、周縁的に位置づけられ錯綜した内容を含んでいたが、やはり変容をうかがわせるテーマで、第2の語りでも詳細に触れられた。㊩「家族関係」も第1の語りでは周縁的

な位置を占めていたが、第2の語りでの詳細な内容によって、㉗㉘㉙の変容を規定する力をもったテーマと思われた。したがって分析ではこの㉗～㉙のテーマがどのように変容し、関連構造をなしているかを時系列に整理していった³⁾。

同時にもう1つの分析の次元は物語の時間への着目であった。物語は多様な時間軸から語られる構造をもつが(やまだ, 2000), Sの語りにも、I「当時の経験と行為」、II「Iの過去の経験に対する現在の視点からの意味づけ」、III「現在の視点における現在の自分の生き方にかかわる語り」の3つがある。特にIIは明確に現在の視点からの意味づけであるもの(II a)と、いつの時点の視点からの意味づけかが不明確なグレーゾーン(II b)ともいうべきものがある。Schütze (1984)は、語り手が現在の視点から人生を振り返って経験を意味づけ解釈するレベルと、本人が過去の時点でどのような経験をし、それを解釈し行為したかという「その個人に特徴的な経験の解釈と行為の傾向」(以下、「解釈・行為パターン」とする)のシーケンシャルな連関である実際の人生の軌跡のレベルとを区別し、両者の相互作用に照準することで人生の軌跡を重層的に理解できるとしている。そこで上述の4つを区別し、まずIのみに注目して過去当時の経験をシーケンシャルに再構成した上で、IIおよびIIIとの関連を検討した。

4 分析結果

以上の分析により、㉗から㉙のテーマ領域の変容過程のI「当時の経験と行為」のみを簡略化し、大きく8段階に区分して整理したものが表1である。以下では、まず表1に沿って㉗㉘㉙㉚がどのような変容を遂げたのかをさらに大きく3つの時期にわけて、Sの当時の経験と行為を再構成し、次に上述のII aの「現在の視点からの意味づけ」とII bの「いつの時点か不明確な視点からの意味づけ」も用いながら、Sの人生を推し進めたものについて考察する(以下では、I以外のII a, II b, IIIについては本文中でそれと示す)。

4.1 幼児期から営業時代まで

幼児期から学校時代を経て就職し鬱に陥るまでずっと、Sは気持ちや思ったことをしゃべること、すなわち㉗〈表現〉への恐怖と抵抗感を感じていた。それは【声に出してしゃべった事、全てみたいに受け取られて誤解されるんじゃないかと思って怖くて】という恐怖であり、また気持ちを表現することは【かっこ悪い】と感じる抵抗感もあった。他方で小中学校時代も[我が強いのに表に出せなくてうつつ]しており、思ったようにしゃべれないことを悩み続けてい

表1 Sの経験と行為

時期	㉗表現	㉘人間関係	㉙ジェンダー経験	㉚家族関係
幼児期	しゃべるのが怖い	一人志向	—————	母:感情的,可愛がらない 父:可愛がる,好き
小中学校	しゃべらない	一人志向	女の子が怖い・わからない 低学年:男の子と遊ぶ,高学年~:男子が苦手	母:感情的,嫌い,しゃべらない 父:冷静,好き,相談,わかってもらえる
高校	しゃべる,笑いあう	仲間,教師	女子校:男子とのかかわりなし	同上
大学	気持ちを表現できない	一人志向	合唱部:同級生は男性ばかりでも平気	家族から離れたい 卒論のテーマ「父親と子どもの関係」
東京:営業時代	日常会話は怖くない	一人志向 (仲間)	男性の顧客:話しやすい,女性の顧客:理解できない 男性と一対一がいや	就職:山口には戻りたくない
鬱に陥る	しゃべりたくない	一人	—————	父にとって自分は"息子"ではなかった
姪との出会い	素直に気持ちを表現	多様な人々	男性と一対一が平気 結婚願望,夫と出会う	母:うざりたい →病床の母:過去を後悔
結婚後-現在	素直に気持ちを表現	多様な人々	コミュニケーションを重視する夫と暮らす	妹や父との関係が密になってきた

た。①〈人間関係〉に関しては、鬱までほとんど「一人志向」を示している。つまりSは一人でいることが好きで、大勢で何かを一緒にするのが嫌いだったが、結果、友人を少数に限定し、自分と合わない相手に対してはコミュニケーションを断つというパターンをとってきた。②〈ジェンダー経験〉に関しては、幼少期から女の子は言動と行動が違ったり、[[気持ちが悪くなるから]]理解できなくて[[怖い]]と感じて、小学校低学年までは男子とばかり遊んでいたが、小学校高学年以降、男子が【苦手】になり、鬱から回復するまで男性と【一対一】がいやだと感じていた。他方で、大学時代の合唱部では同級生が男性ばかりでも【平気】であったり、営業時代も男性の顧客の方が論理的で話しやすいが、女性の顧客は気持ちが変わりやすく理解できなかったと矛盾するような内容の経験を語っていた。また小学校時代は読書が好きで男っぽい強い女の子の主人公が登場する話が好きだったこと、中学校時代はアニメが好きで、女っぽい男のキャラクターを好み、その後の[宝塚好きにつなが]ったとも述べている。③〈家族関係〉に関しては、幼児期から母と父について対照的な記憶がある。母に関しては、突然怒り出したり、[[感情的]] [[ヒステリック]]で、かまってもらったり可愛がられた記憶がないのに対し、父は遊んでくれたり寝かしつけてくれたり可愛がってもらい、[すごく好き]だったという記憶である。その後、Sが謝ったときに母に顔をそむけられ無視された中学時代の出来事がきっかけとなり、【この人は絶対いやだ】と思い、しゃべらなくなった。これに対して父親は[[冷静]]で好きで、【わかってもらえる】と感じ、相談する相手であり続けた。

このような鬱までのSの⑦⑧⑨の経験の中で唯一異質な特徴が見られた時期は高校時代であった。〈表現〉に関しては、アニメ好きの仲間とアニメのアフレコに参加して声を出す恐怖感がなくなり、その仲間たちと入った放送同好会でのアナウンスや朗読によって言葉を使って表現できるようになってきたという。【口に出して何

かをしゃべるのって訓練だなんて思って】と語るように、このときからSは表現の訓練を志向し、大学でも「声を出す」合唱部に入ったり、就職でも【しゃべる】営業職を選んでいる。〈表現〉だけでなく、高校時代の〈人間関係〉もまた鬱以前のSの経験の中で特殊な時期である。顧問の青木が対等な仲間のように生徒とかかわり、親しい関係を築く中で、Sは【語り合い】、【笑い合]ったという鮮明な思い出があり、女子にありがちな[べたべた]した関係や【裏表がない】A高校の仲間と親しい関係の中で一緒に[[楽しい]]高校時代を送ったという。女子校では男子がいないため[すっきり]し、男っぽくふるまっていた。

しかしこのような高校時代の親密な仲間や教師との関係にも関わらず、その後鬱に陥るまで、Sは「一人志向」を示し、家族から離れて一人になりたいと大学時代は山口を離れ、就職でも事務職のようなチームでの仕事を避けて、一人で仕事をするという営業を選ぶが、それは【思ったようにしゃべれない】ことを克服するという理由からの選択でもあった⁴⁾。

4.2 鬱に陥る

営業職に就いてから、多くの人としゃべり【日常会話が怖くなく】なっただけでなく、業績を上げて好調に5、6年が過ぎるのだが、その後Sは鬱に陥ってゆく。鬱を境に⑦⑧⑨が大きく変化しているのだが、鬱の原因として第1の語りでは、営業のノルマの厳しさや利潤中心の仕事が【精神をすり減らした】ことを挙げているのに対し、第2の語りでは、その鬱のきっかけとなったある出来事を思い出している。それは、正月の帰省中に妹の結婚相手にふと漏らした父の発言であった：[“うちは娘ばかりだから、お酒を飲む相手もなくてつまらない”って言ったんですよ、で私はそれを聞いた瞬間に、私は自分を息子のつもりで、お酒だって女の人より人一倍飲むし、家に帰ったら晩酌とかおつきあいで、男みたいに働いてバリバリがんばってるのに、娘なんだって思って、(…)所詮私はお父さんにとって娘なんだあ、息子じゃないんだ、

ハアアッて]. この出来事へのショックをきっかけとして仕事への気力が落ち、親友の結婚や仲間の退職なども重なり鬱に陥っていったというのである. この“父の息子”でありたかったという願望は、鬱の時期に崩壊するまでそれ以前の⑦④⑤に関するSの解釈・行為パターンを（本人には十全に意識されていなくとも）根底において規定する2つの力を持ってきたように思われる. 1つは鬱までの人生を推進する力で、ここではこれを“父の息子”の推進効果と呼ぶ. それは、おそらく幼児期に構築されたのではないかと考えられる. つまりS自身が、母親がヒステリックで矛盾した[女の象徴]で、[女女したのはいや]、[父と意志の疎通が図れない]から[男っぼいのがいい]と考えていたのではないかと振り返って説明(Ⅱb)しているように、おそらく幼少時の感情的な母の怒りの表現への恐怖感と同時に冷静な父親への愛着という経験から、当時のSは父のように冷静で感情を表さないことを善しとする[“父の息子”願望]を基盤とした解釈・行為パターンを身につけ、「しゃべるのが怖い」、「気持ちを素直に表現するのはかっこ悪くてできない」という表現への恐怖と抵抗感が生じた可能性がある.

この<推進効果>は、鬱を境に⑦④⑤が変容したことを以下のように整合的に説明しよう. 第1の語りでは錯綜した内容であった<ジェンダー経験>の男性への苦手意識について、[男の子がいると、女の子っぼい振る舞いを期待されているのがすごく嫌だったのかも] [男女一緒だと、私がどんなに男っぼくふるまっても男にはなれない]とSは振り返って理由を説明(Ⅱa)しているが、鬱以後【男性と一対一が平気】になり、強い結婚願望が生じているように、それまで否定していた女性としての自己をSが構築し始めたことをうかがわせる. また<人間関係>と<表現>も、一人志向で【昔言葉が怖かった時、言ってしまったらそれがそのまま現実になるのが怖かった】(Ⅱb)状態から、鬱以後【色んな人と親密】な関係を結び【気持ちを素直に表現】することを理想とするように(Ⅲ)、この解釈・行為

パターンが大きく転換したことも<推進効果>が鬱まで効いていたことを裏づける.

「父の息子”願望」がSの鬱までの人生に与えたもう一つの効果は<目隠し効果>と呼べるものである. すなわち幼児期の母の思い出にあるような【[感情的]】で【[ヒステリック]】な【思ったことをバーっという】表現を避け、「父の息子”として気持ちを表に出さない」ようにするあまり、それが自身の気持ちに対する<目隠し>となり、気持ちの認識を妨げる効果もあったと考えられる. 鬱の時期、Sはカウンセリングに通うが、[本当は自分が何をしたいのか、何を思ってるのかがわからない]だけでなく、【感情のぶれ】と呼ぶ状態が激しく、【気持ちのままに辛かったら泣けばいいし、楽しかったら笑えばいいのに、なんかそういうことができなくなって、理性で戻そうと思うとぶれちゃう】状態から脱出できずに苦しみ続けたのである. S自身も今の視点から鬱の時期を振り返って、鬱になるまでの自分は[もしかしたら本当にやりたいことがわかっていなかったのかも] (Ⅱa)と述べている.

4.3 鬱からの回復から現在まで

この<目隠し効果>が崩壊し、回復のきっかけとなったのは山口に一時帰郷して妹の子どもである姪と接した経験であった. S自身【一番大きかったのは、子ども、姪っ子と接したのは大きかったな】(Ⅱa)と振り返って述べる. 姪と【一緒にいるとなついてきて】、【なついてくると可愛って思】い、接しているうちに【素直に気持ちを出すように】なってきたのであった. 自分の気持ちや自己を肯定し始めるきっかけであった. また当時Sの妹が[お姉ちゃんは家族の誰からも名前と呼ばれる事がなくてすごく可愛そうだ]と言い、姪にSを[Sちゃん]と呼ばせるようになったことを、[前は自分の名前は嫌いだったのに、子どもから呼ばれると可愛いのもあって、自分で自分のことをSちゃんって呼べるようになって随分変わった、自分をちょっと肯定できるようになった]と回想している.

<目隠し効果>の消滅とこの経験が大きな転

機となり、Sは【自分の好きなこと】を探し始める。そして【私の好きなことって、高校時代にやっていた朗読とかアナウンスとかじゃないかって急に思い出して】朗読の勉強を始める。Sは朗読には、【感情をこめるが走りすぎないで、客観的に人に伝えるための技術が必要】と述べ、それを高校時代に放送部で青木から習った【伝える】ということと結び付けて思い出してゆく。それは母の感情的な「表現」や「父の息子」としての「表現への恐怖と抵抗感」とも異なる第3の〈表現〉のあり方の発見であったとも考えられる。また鬱からの回復の過程で【すごく結婚したくて】と強い結婚願望が生じて占い師を訪ね、【好きな人とだけつきあうようにしなさい、好きなことだけしなさい】と言われ、【好きじゃない人とは(…)もう無理して逢わない、好きなことしかしない(というのを)やってるうちに、だんだん好きなことがわかってきた】という。【好きな人】として思い出した青木に会いに行ったり、その後結婚することになる夫と出会い、素直に気持ちを表現できる場所を【いい生き方をしてるんだな】と感ずるのである。こうして現在【コミュニケーションが大事】という夫と暮らしながら、素直な気持ちの表現や伝えることの大切さを感じる現在に至る⁵⁾。

5 Sの学校経験に関する考察

以上のような人生の軌跡全体の再構成を踏まえると、この事例の場合、家族やジェンダーといった問題関心からより詳細な検討が可能といえようが、以下では本稿の関心である学校経験という視点から提出しうる知見として次の3点に触れてみたい。

1点目は、生徒の成長や問題を考えるときに学校経験のみに焦点を当てるのではなく、個人の人生の過程のシークエンシャルな流れと同時に、その個人が統一的視点から関わっている諸生活領域の相互関連の中での把握が欠かせないということである。Sは人生の物語の核となるストーリーとして〈表現〉と〈人間関係〉につい

て語っており、このストーリーと関連する現在の自分の考え方や生き方を、第1の語りの後半では詳細に語っている。現在のSの理想の〈表現〉の【原点】は高校時代の放送部の経験であると述べているのだが、実際の過程に着目すると、高校時代のポジティブな経験をもってしても、鬱までは「父の息子」の〈推進効果〉〈目隠し効果〉のためにSの⑦⑧⑨は本質的には変容しなかったといえる。この鬱まで基本的に維持され続けたSの解釈・行為パターンは、幼児期におそらく家庭での人間関係を中心に形成された強固なものであり、学校時代も継続されたと考えられるが、こうしたことは、ドイツの生徒のライフストーリー研究でも確認されている知見であり(Kramer, 2002等)、学校経験の意味を、家庭をはじめとする多様な生活領域との関連において検討する必要性を示唆している。

第2点として、教師生徒関係に関してはこれまでそれぞれの役割集団の関係として論じられてきたが、この事例の分析が示唆するのは、個別の特性をもった存在としての教師と生徒の関係が重要な場合があるということである。個人名が挙がっている高校時代の教師、特に多く言及されている青木についてSは、生徒に【仲間】のように接し、【いっぱい時間を過ごしたり】【笑いあい】【語り合った】相手であり、また【心を感じることを(…)素直に自然に表現でき】て【すごいな】と感じていたと語るが、【[ヒステリック]】に怒られ、【かまってもらえな】かった記憶ばかりが残る母に対して、モデルであり、親密な関係を結んだ大人として対照的である。つまり家庭を初めとするそれ以前の人生の過程では出会わなかった〈表現〉や〈人間関係〉のオルタナティブを高校時代に潜在的に提示していた「重要な他者」であったと言えるだろう。こうした教師との【[楽しかった]】放送部の経験は、確かに上述のように当時すぐに人生を転換させる効果はなかったが、鬱からの回復期に思い出され、Sが【自分の好きなこと】として始めた朗読等と関連づけられており、その意味で人生を構築してゆくりソースになったというこ

とである。

第3に、その生徒個人と仲間集団ないし生徒文化との関係の重要性がこの事例からはうかがえる。Sはもともと【人と一緒にが苦手】で【一人が好き】なのにもかかわらず、[友達いなくて可哀想]と思われるのがいやで[不安]をいつも感じていたこと、また小学校6年生頃、嫌いな学級会の話し合いの時一人で本を読んでいて、[すごい怒られてすごいショックで][むかついた]という思い出を語っている。こうしたSの「一人志向」は周囲の視線やプレッシャーと対立していたと思われる。また【言ってることとやることが違ったりして】【人の噂話とか好き】な他の女子生徒はSにとって【怖い】存在であった。こうした小中学校での仲間集団の経験に比して、高校時代は異なっていた。女子校であるA高校入学前は、いじめ等のある【暗い高校生活】を考えていたのだが、実際は、[裏表のない]しかも自分と同じアニメ好きの仲間たちに出会った。この違いは[女の子にありがちなべたべたがなく、でも楽しい事にはワーってみんなが群がって盛り上がるみたいな、そういう距離感が自分にすごく気持ちよかったんだと思う]と説明されるように、A高校の生徒文化に負うところが大きかった可能性がある。

またSは、【まわりにいる友達が(…)先生に対して反抗的だったりすると、あの先生いやだよねって話にしかならないけど、一緒にいた仲間がみんな割と人の面白いところをつかむことが上手い人が多くって、そういうところを(…)楽しんでたっていうのが大きかった】と回顧しているが、生徒文化が当人に与える影響だけでなく、教師生徒関係に与える重層的な影響も浮かび上がってくる。

こうした生徒文化やサブカルチャーの研究はこれまで集団の単位での把握にとどまってきた。しかしある女子高のグループレベルのサブカルチャーを取り上げた宮崎(1998, 296)自らの分析の再考察において、生徒はサブカルチャーを自動的に内面化するのではないこと、むしろ個々の生徒がグループの影響を受けたり葛藤を

覚えながら価値観やアイデンティティを形成する過程の分析が必要であることを指摘している。今後、個々の生徒がその人生において形成してきた解釈・行為パターンと、ある学校の生徒文化やサブカルチャーとの適合関係に焦点が当てられる必要がある。

6 おわりに

本稿では一つの事例の再構成と学校経験の考察を試みたが、個別事例の詳細な解明を踏まえた上で事例比較を重ねることで理論構築すべきであるという立場から、さらに他の事例との比較により人生における学校経験に接近することが今後の課題となろう。例えばSの語りには学校の業績的側面や学習内容は学校経験として当人に意味をもった形としては前面に出てこなかった。こうした側面が重要な位置を占めるような他の事例との比較により多様な学校経験の類型と人生の過程との関係を考察することが可能であろう。

最後に、「人生の物語を語ること」が単なる研究上の意義以上の重みを持ちうる可能性についても一つ補足しておきたい。自己物語の中の非一貫性を示す「穴」ないし語り手にとっての「語りえぬもの」とその「語り直し」が、物語療法においては重要な意味を持つとされているが(浅野, 2001)、第2の語りで明確になった「“父の息子”願望」もその1つであったと考えられる。実際、第2の語りの最後でSは次のような感想を述べている。

青木：(…)Sさんが、今日話しながら、思った事とかあったら＝

S：＝ありますね、先生に聞いてもらえると、なんだか自分でも意識してなかった部分改めて、そうなんだあ、私ってそうだったんだあって、思ったりして、新しい発見があったみたいな気がして、特にお母さん、お父さんに対する自分の思いついて、これまではそんなに深く考えたことなくってね(…)

こうしたインタビューでの即興的な語りの生成の瞬間は、自己物語の語り直しないし再構築の瞬間でもある。例を挙げよう。Sの〈家族関係〉の経験は、鬱を境に大きく転換した他の㉗㉘㉙とは若干異なる展開を示していた(表1参照)。鬱で一時帰郷していたSにとって、母は相変わらず【うざったい】存在であった。その後第1の語りでは、癌で苦しむ母の死が迫った時、過去の出来事を【絶対許さない】としてきた自分を後悔し、最期の時をともに過ごしたことは語られていた。しかし第2の語りの最後に、Sはそれ以前の語りとは大きく異なる母の思い出に言及し始める。それは、それ以前の否定的になりがちな母の記憶とは異なるもの、Sへの愛情が表現された死の間際の母の思い出である：「結婚した方がいいって昔からずっと言ってたから、病室でそういう話になったときに、実は東京に結婚しようと思ってる人がいるって言った瞬間に、えっ、バンザーイ、よかったあって」とSは涙をこぼしながら語った。おそらくこの第2の語りのこの瞬間こそが、思い出が蘇り、母との関係が「語り直された」瞬間であり、自己物語に一つの変容が生じたのではないかと我々は感じている。人生の物語を語ること自体が、人の現在とさらには未来の構築に影響を及ぼす可能性がこうした「語る」行為に秘められているように思われる。

〈参考文献〉

- 浅野智彦(2001)自己への物語論的接近：家族療法から社会学へ 勁草書房
- ピアルケ(當山)千咲(2004)ドイツにおける質的・学校・青少年研究の動向と「生徒のライフストーリー研究」教育研究, 46, 153-161.
- Flick, U. (1995). *Qualitative Forschung*. (小田博志他訳 質的研究入門 春秋社 2002)
- 藤江康彦・本山方子(2003)学校の原風景としての語りの構成 東京大学大学院教育学研究科紀要, 42, 319-335.
- 和泉広恵(2001)虐待の物語と体験の狭間 家族社会学研究, 12, 211-222.
- Kramer, R.-T. (2002). *Schulkultur und Schülerbiographien*. Opladen: Leske + Budrich.

- 宮崎あゆみ(1998)ジェンダー・サブカルチャー：研究者の枠組みから生徒の視点へ 志水宏吉(編)教育のエスノグラフィー, pp.275-301.
- 水野節夫(1986)生活史研究とその多様な展開 宮島喬(編)社会学の歴史的展開 サイエンス社 pp.149-208.
- 水野節夫(2000)事例分析への挑戦 東信堂
- 桜井厚(2001)インタビューの社会学：ライフストーリーの聞き方 せりか書房
- Schütze, F. (1984). Kognitive Figuren des autobiographischen Stegreiferzählens. In Kohli, M. & Robert, G. (Eds.) *Biographieforschung und narratives Interview soziale Wirklichkeit* (pp. 78-117). Stuttgart: Metzler.
- 高橋亜希子(2002)学校の“場”が生徒の成長に及ぼす影響 近藤邦夫・志水宏吉(編)学校臨床学への招待 嵯峨野書院 pp.69-88.
- やまだようこ(2000)人生を物語ることの意味—なぜライフストーリー研究か? 教育心理学年報第39集, pp.146-161.

〈注〉

- 1) 豊かで深い語りをしてくださったSさんに心から感謝致します。Sさんの人生の物語の取り組む過程は、筆者ら自身の人生をあらためて省察するきっかけともなった。
- 2) 分析にあたり水野節夫先生に多くの有意義な助言を頂いたことを心から感謝致します。
- 3) 和泉(2001)は、「物語」として組織化されない経験についての語り、ナラティブ・セラピーでは単なるオルタナティブ・ストーリーの予備軍として位置づけられがちだが、それ自体が当事者の経験で重要な意味を持ちうることを指摘している。我々は、こうした語りを全て含めて時系列に沿って整理することで、Sの人生の物語の核となるストーリーとは別個に、実際に人生の軌跡がどのようなものであったか可能な限り再構成しようとした。この手続きによって最終的に浮かび上がってきたのが㉗㉘㉙の4テーマである。
- 4) 第1の語りでS自身は「高校時代が人生の転換期」と述べていたが、その後の大学時代や営業時代の解釈・行為パターンに注目するとそれ以前と基本的に変わっていない。つまり「高校時代＝転機」というのは現在のSの視点からの意味づけであり、分析手続きにおいて述べたようにそれがⅠ「当時の経験と行為」とⅡ「Ⅰの過去の経験に対する現在の視点からの意味づけ」を区別した再構成を行うことにした所以である。
- 5) ここでは残念ながらSのⅢ「現在の視点における現在の自分の生き方にかかわる語り」に詳細に触れる余裕がないが、これについては次の機会に譲りたい。